

「あれ、オスカーがいない。どうかしたんですか？」

ある日のこと、執務室を訪ねてきた魔女にラザルは苦笑した。

「体調を崩されてるんですよ。熱を出されてまして」

「え。珍しい……。何かの前触れですか」

ひどいことをさらりと言う魔女だが、確かに彼女がこの城に来てからオスカーが寝込むのは初めてだ。というカラザルが知る限り一年に一回あるかないかだ。ティナーシヤは混然とした執務机を見やる。

「それは周りも大変でしょう。この国、あの人の負っている仕事量すごいですからね。大丈夫ですか？」

「大丈夫ではないんですけど、まあこういうこともたまにはありますので」

「私がやってもいいんですけど、さすがにまずいですね」

細い腕を組んで思案するティナーシヤに、ラザルは曖昧な笑顔になる。

主人の守護者であり永い時を生きる魔女は、もともと高い執務能力を持っているのだが、立場もあって彼女単独で何かをするということはない。基本的には彼女の手を離れたものはオスカーが確認することになっている。

結局今日一日は主人の休養日になりそうだ——そうラザルが思いかけたところで、ティナーシヤはぼんと手を打った。

「いいこと思いつきました。とりあえず見舞いに行つて、適当に治療してきます」

「それはありがたいですが……ティナーシヤ様、どうし

て書類をお持ちになつてるんですか」

「へーきへーき」

「何が平気なんですか、あの……」

ラザルが問おうとする間にも、ティナーシヤは書類を抱えこむとふつと姿を消す。

相変わらず彼女は、主人と同じくらい行動が唐突で読めない。

そんな彼らの傍にいる我が身をふつと振り返つて……ラザルは小さな溜息をついた。

広い湖の畔に座っている。

空には雲一つない。水面には波紋もない。ただ静かなだけの光景だ。

それが夢の世界だと、オスカーは知っている。

昔から体調が悪い時には似た夢を見てきたのだ。今もだから、復調するまで浅い眠りの中でこの夢を断片的に見ていくのだろう。できれば早く目覚めて執務をしたいが、自分ではどうしようもできない。実に落ち着かない。

そんなことを考えていた彼の隣に、ふつと一つの気配が現れる。オスカーはすぐ傍に座ったその人物を見て目を丸くした。

「ティナーシヤ」

「具合はどうですか。熱は魔法薬で下げましたが」

「夢の中でどうかと言われても……」

「あ、夢って自覚はあるんですか。それは重畳です」

「自覚はあるが、お前も変に現実味があるな……。せめて俺の夢なら俺の希望をもう少し反映して欲しいというか。服装を変えさせてもいいか？」

「夢の中まで着せ替えはやめてください。第一私、夢じゃないですから。魔法を使って貴方の夢に侵入してます」

「……何をやってるんだ」

「今日の分の仕事、私が処理しますからそこで確認していつてください。そうすれば心置きなく休めるでしょう？」

「すごいことを考えるな、お前」

だが考えてみればそれでひとまずはしのげる。ティナーシヤ自身の能力は申し分ないが、やはり王の承認がなければ動かせない物事は多いのだ。オスカーは自分の膝に頬杖をつくと苦笑した。

「分かった。ならそれで頼む」

「はい。あ、横になつていいですよ。きりのいいところで声かけますから。ほら、どうぞ」

「別にどの姿勢でも変わらないんだがな」

それでも彼女が言ってくれるのなら好意に甘えることにする。オスカーは魔女がぼんぼんと叩く膝に頭を預けた。その上にティナーシヤは遠慮なく書類の束を置く。

「お前……人の頭を物置にするな……」

「ちょうどいいところにあるので」

束の間の熱が作る、平和すぎる景色。

夢の中の夢でまどろみながら、王はそうしてのんびりとした休養を味わったのだった。